

いちようの大木

学校にあるいちようの大木が、いよいよ色づき始めました。澄み渡る秋の青空とのコントラストがとてもきれいで、思わず見上げてしまいました。

この大木は、いつからここにあるのかなあ…、樹齢は何年だろう…、これからもずっと阿武小学校で生きていくんだなあ…などと考えながら見上げていると、色づいた葉が落ちてきました。ある学校職員が「いずれ、この辺りが落ち葉でいっぱいになって、掃くのがたいへんです」と言っていました。本当にそうだろうと。いろんな意味で秋の深まりを感じるとともに、月日の経つ早さに思いを馳せずにはいられませんでした。

そういえば、先月は、落ち葉ではなく銀杏がたくさん落ちていました。今年も、くすのきボランティアの高井さんがその銀杏を集めて、水につけて果肉を取り除く作業をしてくださいました。「子たちに、学校でも四季の移り変わり、自然の営み、恵みを感じてほしい」とおっしゃられ、手がかぶれました、と言いながらもしてくださいました。高井さんに感謝です。実は今年、この作業の一部を進んで手伝う子どももいて、いちようが織りなす秋の実に、うれしい気持ちになりました。近くの遊具で遊ぶ子どもたちの元気な声に、思わず微笑みながら、1年前、「笑うことは大事」と心から思っていた自分を思い出し、あらためて「楽しさあふれる阿武小学校」であるように…と思いました。

ところで、この大木、いったい何メートルあるんでしょう…。



保小中の合同避難訓練と引き渡し訓練

11月8日にみどり保育園と阿武小・中学校が合同で、地震・津波対応の避難訓練と有事を想定した引き渡し訓練を実施しました。

「きっと自分は大丈夫」…そんな気持ちが心のどこかにないでしょうか。「自分の命は自分で守る」…そのために、子どもたちには、日々の生活の中で自分にできること、そして災害が起きたときにしなければならないことに「きづき」、それを忘れないよう心に「きめて」、意識してほしいと思っています。学校でも継続して働きかけてまいります。ご家庭でも、放課後や休日で気を付けること等、いっしょに考えていただければと思います。



学力の向上にむけて

山口県の学力定着状況確認問題を10月17日に6年生が、24日に5年生が行いました。これは、一人ひとりの学力の状況を把握し、今後の学習指導に役立てるために実施したのですが、今回、紙によるテストではなく、一人一台タブレット端末を活用してネットワーク上で行いました。

4月の全国学力・学習状況調査の結果では、本校は、国語、算数、理科ともに全国平均を下回りました。これから求められる学力を確実に身に付けさせるために取り組んできたことを、このたびの問題の結果で確認することが大切となります。

本校では、「基礎学力の定着を図り、ともに学び合う児童の育成」を重点目標として取り組んでいます。基礎学力の定着に向けては、「家庭学習の習慣化」「年3回の全校基礎学力向上テスト」等ありますが、地域の方にも、週2日、朝のスキルタイムの「丸付け先生」を通して児童のがんばりを認めていただいています。11月からは、1年生も一定の学習が進んだことからこれを開始しました。早速、地域の方から「今日は1年生の丸付けを楽しみに来ました。」「〇〇さんの字がとてもきれいで、びっくりしました。がんばっているんですね。」と笑顔いっぱい話してくださいました。今後もこれらの取組をベースとして、学習内容の理解が遅れがちな児童に対する丁寧な対応をご家庭と連携しながら進めることと、定着に向けた効果的な手立てについて学校全体で考え取り組みます。



丸付け先生にご関心のある地域の方がいらっしゃいましたら、ぜひ学校までお電話ください

☎ 2-2301

人権教育参観日と講演会



11月1日に人権について学習する子どもの様子を参観していただきました。ご多用中、ご参観いただいた保護者、そして地域の皆様ありがとうございました。また、特別支援教育についての理解を深めたいとの思いから、この日の講演会では、2012ロンドンパラリンピックに視覚障がい者のマラソン伴走者として出場された北村拓也さんにご講演いただき、子どもたちにも聞いてもらいました。やさしい語り口で、私たちに、共に生きるために大切なことは何か、そのために自分事として考えることから始めよう等の、たくさんの温かいメッセージを語ってくださいました。

やさしい語り口で、私たちに、共に生きるために大切なことは何か、そのために自分事として考えることから始めよう等の、たくさんの温かいメッセージを語ってくださいました。

- ・私もいつか人を助けるような人になりたいと思いました。
- ・目が不自由な人は、見えなくても人を信じることでがんばっているということを知って、とても勉強になりました。
- ・「みんなちがうからすばらしい」と言われてうれしくなりました。
- ・伴走者が前に出て引っぱるのではなく、声をかけ続けて、走る人のペースに合わせて走っていることを知って、とても大切なことだと思いました。